
神隠し

デベ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神隠し

【Nコード】

N1887I

【作者名】

デベ

【あらすじ】

猟奇作品です。そういうものが苦手な方、そして心臓の弱い方は見ないことをお勧めします。

違和感

「ふあー……。眠い……。」

授業はつまらないもの。

これについては9割の人は同意してくれるだろう。

更に今講義している先生は学校でも1・2を争う眠気を誘う先生だった。

何しろ生徒を指名することもしなければ、こちらを見向きもせずに黒板に向かって授業をしている。

授業の始まりと終わりだけ顔を向けるが、それ以外は決してこちらを見ようとしなない。

しかも教科書に書いてあることを本当にそのままやっていくものだから堪らない。

声も淡々としたもので抑揚などかけられない。

この先生に関しては睡眠薬並の効果があるんじゃないだろうか。

結局授業の終わりまで耐えきれず、睡魔に身をまかせてしまった。

目を覚ますともう授業は終わってしまったらしく、教室内に残っている人はまばらだった。

周囲を見渡すが仲のいい友達の姿は見当たらない。

「……。起こしてくれてもいいだろ。」

腹が立ったが、寝てしまった俺が悪いのでそこまで文句は言えない。ふと、何か違和感あった。

何か奇妙な物を見た気がしたのだ。

周囲を見渡す。

俺以外にも何人かいる。

皆俺と同じように寝てしまっている。

全員起こしてもらえなかったのだろう。

『駄目だ。』

それだけのはずなのだ。

『それ以上見ちゃいけない。』

しかし、何故か心の奥の方が納得していない。

『それに気がたら戻れなくなる。』

知らず鼓動が速くなっている。

『引き返せ。』

自分でもわからないが体中から嫌な汗が噴き出してきた。

『引き返せ引き返せ。』

一番近くで寝ている人に近づいて行く。

『引き返せ引き返せ引き返せ。』

近づいて行くに連れ、何か異臭がすることに気がついた。

『駄目だ駄目だ駄目だ。』

もう寝ている人の真横まで来た。

『それを見るな。それは——だ。』

寝ている人に手をかけた。

『——だ。見なくてもわかるだろ。』

手に当たる感触がおかしい。

『当然だ。それは——なんだから。』

手に力を籠めた。

『やめろやめろやめろ。』

俺はそれを見る覚悟を決めた。

『君！大丈夫か！？』

『うわあ！！！！！！』

その直前、後ろから声をかけられた。

驚いて慌てて振り返る。

「あ、脅かしてすまない。何か様子がおかしかったものだから……」

「あ、いえ。俺こそ驚かしてすいません。」

声をかけてきたのは気の良さそうな青年だった。
後ろを振り返る。

これだけ騒いだにも関わらず起きる気配がない。

『当たり前だそれは——なんだから。』

先ほども感じていた嫌な気配も消えてしまっていた。

「大丈夫かい？ 顔色が良くないみたいだけど・・・。」

「あ、はい・・・。ちょっと気持ち悪くなっちゃって・・・。」

「それはいけない！ すぐに保健室に行こう！ ほら肩を貸して！..!」

「あ、ありがとうございます・・・。」

思った以上に疲労していたらしく体がうまく動かなかった。

仕方なく好意に甘えさせてもらうことにする。

青年の肩に寄りかかる。

『一瞬、——と同じ臭いがした。』

「じゃあ移動するよ。」

「あ、はい。お願いします。」

ゆっくりと移動を開始する。

この教室からなら保健室はすぐそこだ。

不幸中の幸いだったかもしれない。

青年に連れられ教室を出る。

いつもなら騒がしいはずの廊下がとても静かだった。

『それは皆——になってるからだ。』

すぐに保険室に着いた。

「近くて良かった。実はちょっと重くて辛かったんだ。」

「すいません。ありがとうございます。」

ベットに寝かせてもらう。

極度の疲労からか、横になった瞬間眠気に襲われた。

「ん？ 眠いのかい？」

「そうみたいです・・・。」

「そうか、じゃあしばらくしたら起こしに来てあげるよ。」

「はい・・・お願いします。」

「ああ、まかせて。」

睡魔に襲われていてぼやけていたが、目を閉じる寸前、青年の顔が

醜く歪んでいるように見えた。

「おやすみ・・・。」

「・・・おやすみなさ・・・。」

俺はそのまま眠りについた。

惨劇

「んんー!・・・あれ、どこだここ・・・?」

目が覚めると見知らぬ場所にいた。

「頭がぼーっとしてゐるな・・・。」

そうだ、確か授業中に耐えきれずに居眠りをしたんだ。

それで気がついたら授業が終わって、8割はいなくなっていたな。残ってるのは俺も含めて寝ているやつらだけだった。

『寝てたんじゃなくあれは——だった。』

そんで近くで寝ているやつを起こそうとしたら、後ろから声をかけられたんだ。

『違う。本当に——かを確認しようとしたんだ。』

そんで肩を貸してもらって保健室に来たんだったな。

「あれ? すごいえばあの人はどこにいったんだ。」

保険室の中を見渡すが誰もいない。

時間はあれから1時間しか経っていないようだ。

ここにずっといてもあれだし、あの人を探そう。

ベツトから降りて廊下に向かう。

その時、何故か視界に掃除用具箱が目に入った。

『見るな。』

何故か酷く気になる。

『それは開けちゃいけない。』

ちよつと開けてみよう。

『そこにはきつと——が。』

取っ手に手をかける。

『やめろ』

そのまま開く。

「—————。」

掃除用具箱の中には当然のように掃除用具が入っていた。

「まあそうだよな。何を警戒していたのやら。」
気を取り直して廊下に出る。

あの人はどこに行ったのだろうか。
物音一つしない廊下を進んでいく。

あてもなくフラフラと歩く。

俺の脚は音楽室へと向いていた。

肩を借りたときに感じた臭いが、そっちの方から漂ってきたからだ。
脚が動くままに音楽室へと入る。

本来なら部活動をしている連中がいてもおかしくない時間だ。

しかしその教室には誰一人いなかった。

そのまま教室の中を見渡して見る。

「・・・音楽準備室か。」

音楽室だからか自分の声が酷く響いた。

フラフラとした足取りで音楽準備室に近づいて行く。

中から例の臭いがする。

おそらくあの人もここにいるんだろう。

ドアノブを捻ってドアを開く。

そこには――――。

「やあ、目が覚めたみたいだね。」

予想通りあの人、青年がいた。

「あ、はい。おかげさまでぐっすり寝れました。」

「あははは。それは良かった。」

笑顔で迎えられたので若干緊張を解く。

「そういえば君さ。」

若干声のトーンが落ちたような気がした。

「保険室の掃除用工具箱は見たかい？」

なぜそんなことを聞くのだろう。

よくわからないが正直に答える。

「はあ・・・。何か気になったんで見てきましたけど・・・。」

「あははは。そっかそっか。――――を見たんだ。」

よく聞こえなかった。

何を見たというんだ。

「わからないって顔してるね。脳が理解するのを拒否しちゃったのかな。」

「はい？なんのことですか？」

青年はよくわからないことを言っている。

「うん。どうやら君は脳の一部が壊れちゃったみたいだね。」

「え！そうなんですか！？」

「くすくす。自覚がないんじゃない絶望的だ・・・。」

「笑いごとじゃないですよ！？なんとかならないんですか！？」

「あははは！脳がいかれたんじゃないでしょうもないな。」

「そんな・・・。」

「ふふふ。君はもつと心配すべきことがあると思うんだけどね？」

「え？何がですか？」

「やっぱり脳が壊れてるね。簡単に言うとなね君も工具箱にあった——と同じになるってことさ。」

どうも耳の調子がおかしい。

一番重要な部分が聞き取れない。

「すいません。聞こえなかったんですが、工具箱にあったんでしょう？」

「そうかそうか。工具箱じゃなくてもいいんだけどね。」

「他にもどこかにあるんですか？それって俺も見えます？」

「あははは。もちろんだよ。だって、君の目の前に転がってるじゃない。」

青年がそう言った。

俺は目の前を見える。

そして顔を回して準備全体を見回す。

「どこにあるんですか？何も見当たらないんですが。」

「あははは。やっぱり脳がいかれたみたいだね。こんな大量に転がってる——が見えないんだから。」

「まただ、俺にはどうしても一番重要な場所が聞こえない。転がっている何が見えないというんだろう。」

「俺の目の前には——しかないのに。」

「青年の言うことはよくわからない。」

「まあいい。君にこの薬をあげるよ。」

「なんですかこの薬？」

「薬にしてくれる薬さ。」

「麻薬とかじゃないですよね？」

「あははは。あんな一瞬の物じゃないよ。永い間薬にしてくれる薬さ」

「ふーん。じゃあ好意に甘えていただきます。」

「はい。水だよ。」

「ありがとうございます。・・・なんかこの水、鉄臭くないですか？」

「そんなものだよ。」

「そうですか？それじゃあいただきます。」

「鉄の臭いがきつい。」

「これは一気に行った方がよさそうだ。」

「んっ！」

「おお！一気に行ったね。」

「不味い・・・。」

「それはそうだろう。それがうまいなんて言ったらそいつは人間じゃないよ。」

「そうなんですか・・・。」

「おかしいな瞼が重くなってきた。」

「凄い眠気だ。」

「耐えられそうにない。」

「すいません。なんか眠くなってきました・・・。」

「薬の効能だよ。君は気にしないでいい。」

「・・・そう・・・ですか・・・。」

俺は意識を保てずそのまま床に倒れる。

床はなぜか水浸しだった。

しかし、俺はそのことを理解する前に意識が落ちてしまった。

「そう、気にしなくていい。」

そういうと青年は今しがた倒れた少年に近づいて行く。

「君もすぐ、そこに転がっているその子と同じ末路を辿るんだから。」

倒れた少年の隣には血まみれの死体が転がっていた。

彼が通ってきた音楽室・音楽準備室の壁という壁は真っ赤に染まっており、赤く染まっていないところなどなかった。

「君はゆっくりと始末してあげるよ……。ゆっくりとね……。」

そしてその学校から青年以外の生物は消えた。

事件が発覚してから警察が現場検証をした結果。

その日、学校を欠席した生徒以外の全ての人物が殺されていた。

遺体は遺族に返されたが、ただ一人だけ、どんなに探しても、血液どころか毛の一本も見つからない生徒がいた。

まるで、神隠しに出会ってしまったかのように、その少年がいた痕跡はなくなっていたという。

その少年がどうなったのか、唯一遺体の見つからなかった遺族は、今も懸命に目撃情報を探しているのだそうだ。

惨劇（後書き）

なんか終わったような気配ですが、実はまだ続くのです。

最後の1本（前書き）

ホラーというより怪談になってしまった。

最後の1本

「そのことが原因で、少年の両親も精神的に病んでしまい、息子の後を追うように亡くなってしまった。そして死後も少年の両親は彼を探して彷徨っているのだそうよ。」

そこで話は終わりなのか少し間を置いた。

そして近くに置いてあった蝋燭を吹き消した。

「うう……。もう嫌あ。皆帰ろうよ。」

「何言ってるんだよ。後1本なんだから我慢しろよ。一人で帰るんなら話は別だよ。」

「まあまあ卓海、そんないじめてやるなって。」

「だってよ達也。夏美のやつが今更そんなこと言うから。」

「私も達也に賛成かな。」

「明美までそういうこと言うのか。」

「仕方ないじゃない、だって後1本だもの。」

「落ち着けよ。どうせ夏美も一人じゃ帰れねえんだし無視して話始めちまえばいいんだよ。」

「何気に雅人が一番酷いな……。」

「そうね……。」

「そうだな……。」

「俺かよ！ まあいい、そういえば次は誰だ？」

「僕だね。」

「亜矢か。」

「だからもうやめようよー。」

「よし。始める亜矢。」

「僕はいいけど、一人マジ泣きしてるよ？」

「まあ大丈夫じゃない？」

「そう？」

「大丈夫じゃないー！」

「そっか、じゃあ始めるね。」

「結局私の意見聞いてないしー!」

「ほら夏美こっちおいで。」

「明美いー!」

「いいぜ亜矢。」

「最後の1本だから気合入れるね。」

「期待してるぜ。」

「楽しみだね。」

「夏美。そろそろ観念しなさい。」

「したくないー。」

「・・・僕が先輩から聞いた話なんだけどね。」

そして、最後の話が始まった。

最後の1本（後書き）

僕っ娘！僕っ娘！！

お姉さん！お姉さんっ！！

く作者重病により作品は未完のまま終わりましたく

首なし…前編

その日は残業で遅くなってしまった。

もう終電も終わってしまっている。

タクシーを拾おうかとも思ったが、財布と相談した結果、徒歩という結論に至った。

だいぶ遅い時間だが好き好んで男を襲うようなやつはいないだろう。自分で言うのもなんだがこれでも休日はジムに通って体を鍛えている。

スーツの上から見てもわかる程度には屈強だ。

それに治安もだいぶ良いのでそんな心配は無意味だろう。

「そんなことより、寒いのが辛いな・・・。」

12月も半ばまで来ているせいで、最近では夜中であってもとても寒い。

さらにこの辺りは障害物がなく、風に晒されるので体感温度も低い。

「のんびりしてたら風邪ひきそうだな・・・。」

街灯の間隔がとても遠くなっているような気がしてきた。

とにかく家に帰って温まろうと思い、歩く速度を上げた。

そして街灯を通り抜けた時だった。

「すいません。その方。」

おそらくこんな時間に歩いているのは自分だけだろう。

つまり声をかけられたのは自分ということになる。

声をかけられて無視をする訳にもいかず、立ち止まって振り返る。

先ほどまでは誰もいなかったような気がしたが、街灯の下に人がいた。

正直なところ気味が悪いが、無視して纏わりつかれても困る。

振りかえりながら早口でまくしたてる。

「なんでしょう？こんな時間ですし、寒いので早く帰りたいのですが。」

つまり要件があるなら早くしろということだ。

少しばかりきつめに言ったので理解できるだろう。

声の質や体つきからおそらく女だろうとわかる。

おそらくというのは深くフードを被っていて顔が見えないからだ。

「あの、大切な物をなくしてしまっただんです……。探すのを手伝ってもらえないでしょうか……。」

「それは日が昇ってからじゃダメなんですか？」

「ダメという訳ではないですが……。できればすぐにでも見つけたいんです……。」

「ダメじゃないのであれば、日が昇ってから探すことをお勧めしますよ。私も忙しい身なので速く帰って休みたいんでね。」

「はい……。引き止めて申し訳ありませんでした……。」

突き放すようにそう言うと、女は悲しそうな声で謝った。

そしてそのまましゃがみ込むと街灯の周囲を探し始めた。

何を探しているのか知らないが小物なのだろう。

見つからなければ帰るだろうと考えると、その日はそのまま帰路についた。

首なし：後編（前書き）

サーバートラブルのせいで同じの2回投稿してしまったので、総書きなおしをしております。

首なし…後編

翌朝、会社に向かう途中、昨晚女と出会った場所に妙な人だかりが出来ていた。

何か嫌な予感がした。

「ちょっとすいません。これは何があったんですか？」

野次馬の一人に事情を聞く。

「どうも夜中に女性が一人、酔っぱらいの運転してた車に撥ねられたらしいのよ。しかもその女性は街灯と車に挟まれたせいで体の一部が潰れてなくなっちゃったみたいよ。」

背筋を一筋の汗が伝った。

あの女はあれからもずっと何かを探していたのか。

「そうですか……。ありがとうございます。」

気のよさそうなおばさんにお礼を言うと、その場を早足で離れた。だから帰れと言ったんだ。

ふと足元を見ると、安物っぽい指輪が転がっていた。

事故現場から数百メートル離れているが、なんとなくあの女が探していたのはこれだと感じた。

今から戻っても会社に遅れるだけでいいことはないだろう。

帰りに供えてやろうと考え、会社への道のりを急いだ。

その日の帰り道、また残業で遅くなってしまった。

昨晚と同じ道を歩いて行く。

今朝見かけた事故現場にはもう人だかりはなく、その代り花束が置かれていた。

通勤途中に拾った指輪をその花束の所に置いてやった。

そして手を合わせ黙祷した。

『ありがとう。』

どこからか、あの女性の声がした。

それを聞いて心が軽くなった気がした。

どうやら本人にも気付かなかったが、罪悪感があったらしい。直後、誰かが道路を裸足で歩いているような音が響いた。

その音が徐々に近づいてくる。

急に体が重くなったように、身動きが取れなくなった。

『逃げて。』

またあの女性の声が聞こえた。

すると、先ほどまで感じていた体への圧迫感が消えた。

全力で走り出す。

少し走ってから思わず後ろを振り返り、その音を発している者を確認した。

気のせいだと思ったかった。

振りかえったとき、ちょうどそれは街灯の下に来ていた。

それは首から上がなく手には大きめの鋸を携えていた。

足の骨が折れているのか足を引きずるようにこちらに向かって来ていた。

恐怖で足を止めそうになる。

『足を止めちゃ駄目。』

三度、あの女性の声が聞こえた。

その声で止まりかけた足を動かす。

そこから後のことはよく覚えていない。

全力で家まで辿り着き、布団に潜り込んだような気がする。

次の日、同じ道を通って出勤する。

若干寝不足だがそうも言っていられない。

同じ道を歩いていくと女性が事故にあった場所にまた人だかりができていた。

「何があったんですか？」

昨日とおなじおばさんがいたので事情を聞く。

「また事故があったらしいのよ。今度も酔っぱらいが運転する車

がその街灯に突っ込んだらしいんだけどね。運転してた人が死
んじやったみたいよ。」

何か、悪寒がした。

「その人の首がなかったってことは……。」

なんとなくだった。

本当になんとかそう思った。

「あら？よくわかったわね？そうなのよ。昨日の女性と同じで
また首がなかったんですって。」

おばさんがまだ何かを言っていたが、まったく耳に入ってこなかっ
た。

あの時、女性の声が聞こえなかったらおそらく……。

おばさんにお礼を言って、会社に向かって歩きだした。

そして二度とこの道を通らないと心に決めた。

その日は定時で帰ることが出来た。

あの道を通ることだけは避けたかったので電車で帰ることにした。

電車に乗ればあの道を迂回するように家に帰ることができるからだ。
座席に腰を下ろす。

誰かの声が聞こえた気がした。

「？今『駄目』って……。」

電車が出発した。

そこで気がついた。

しかしあまりにも気がつくのが遅かった。

何故、帰宅ラッシュのはずの時間帯に、他の乗客が誰もいないのだ。
自分の鼓動が速くなるのを感じた。

後ろにある車両間のドアが開く音がした。

それに続くように音が聞こえてきた。

誰かが裸足で歩いているような音だった。

徐々に近づいて来る。

一歩、近づいた。

また一歩、近づいた。

そしてその音は背後まで来ると止まった。

恐怖により後ろを振りかえることができない。

歯の根が合わない。

肩に手を置かれる。

この世の物とは思えないほど冷え切った手だった。

耳元で風を切るような音がしている。

あの道を通れば、助かったのに・・・。

そう、聞いた気がした。

百物語

「それで、その人はどうなったの・・・？」

間が出来たことに耐えきれず、夏美は恐る恐る尋ねる。

怖いなら聞くなと言いたくなる。

亜矢あやは夏美を無視して話を続ける。

「その人は周囲が一瞬目を離れた間に、駅のホームから消えてしまっていたんだそうだよ・・・。神隠しに出会ってしまったようにね・・・。」

そこでまた間を置く。

「だけど1週間後に、その線路沿いの土手で見つかったんだ・・・。」

夏美が無視されたことと結末への恐怖で涙目になる。

もちろん思慮に入れてはもらえない。

「なぜか首だけがなくなった状態だね・・・。」

途中で結末が読めたにも関わらず、夏美はそれを聞いて明美あけみにすがりつく。

「周囲をいくら探しても首だけではどうしても見つけれなかった・・・。結局犯人は逮捕されず、今も次の獲物を探しているらしいよ・・・。」

そこまで話すと最後の蠟燭を吹き消した。

全ての蠟燭が消えたが、百個もの物語を話している内に日が昇り周囲は明るくなっていった。

全員が沈黙する。

夏美など物音がしたら卒倒してしまいそうなほど震えている。

「・・・結局何も起こらねえんだな。」

「仕方ないよ雅人まこと。怪談なんてそんなもんだよ。」

「だな。達也たつやの言うとおりだぜ。所詮怪談だからな。」

「あら？その割には卓海足たくみが震えているようだけど？」

「だ、誰がだ!!」

「だからあなたよ。」

「まあまあ喧嘩しないでよ。それより夏美、僕の話はどうだった?」

「亜矢。怒りたい?」

夏美は涙目で睨みつける。

雨ざらしで濡れている子犬のような目をしているため迫力はない。

「あはは。ごめんごめん。あんまりかわいい反応してくれるからいいね。」

「ついね。じゃない!」

蠟燭を吹き消した直前の張りつめた空気は弛緩し、全員が肩の力を抜いた。

「それにしても、百物語をした後は異界に引きずり込まれるってのはやっぱり嘘だったか。僕はとても残念だよ。」

「そんなのある訳ないだろ。第一、真ん中付近は怪談ですらなかっただろ。」

「そうそう。旅行から帰って来たら中には大量のゴキブリが!とかあったからね。」

「でも、とても怖かったわよ? ガサガサって足元這って行った時は気が狂うかと思ったわよ。」

「確かにそりゃあ怖えな。」

「雅人でもアレは駄目なんだね。・・・さて、じゃあそろそろ片づけて帰ろう。」

「そうだね。僕もそれがいいと思う。」

お互いに指示を出しながら手際よく片づけて行く。

それほど時間をかけずに片づけは終了した。

「さて、じゃあ帰りますか!」

「卓海が生き生きしだしたわね。」

「そうだな。さっきまで2番目くらいに静かだったってのにな。」

「1番はもちろん私だよね・・・。」

「言うまでもないよね。・・・あれ? 亜矢どうかした?」

「ううん。なんでもないよ。」

「そう？ならいいけど。」

亜矢は窓の外を見る。

外は明るくなってきている。

これは間違いない。

しかし、普段なら聞こえて来る鳥の囀りが、全くと言っていいほど聞こえてこなかった。

違和感が残ったが、一緒に一晩を過ごした仲間と呼ばれ、気のせいだろうと踵を返した。

百物語（後書き）

その後、二度と彼等の姿を見ることはできなかった。

彼等は生徒用玄関に下履きだけを残し姿を消した。

一月経っても二月経っても見つけられず、周囲は声を揃えてこう言っていた。

彼等は神隠しに遭ったんだと。

というフェイント。

まだ終わりませんよ!!!

赤紙青紙：前編（前書き）

完全に学校の怪d（以下略）

赤紙青紙..前編

「ねえ亜矢、夏美。帰る前にお花を摘みに行かない？」

「う、うん。行く。」

「そうだね。僕も付いてくよ。」

「そう。じゃあ少し離れたところで待ってるよ。」

女子3人がトイレに入って行く。

男3人はその場でお留守番することになった。

「じゃあ私は扉の前で見ているから二人がお先にどうぞ。」

「な、何もでないよね・・・？」

「夏美は心配性だね。じゃあ僕はお先に失礼するよ。」

「ほら、夏美も早くしなさい。男子が覗きに来ちゃうかもしれないわよ？」

「そ、それは嫌・・・。」

「なら早くなさい。」

夏美は恐る恐るトイレに入って行く。

なんだかんだと言いながら、明美もそれほど怪談の類は得意ではない。

お嬢様だからというプライドだけで己を支えているだけだ。

よって、トイレの個室に入っていないとはいえ、実はとても心細かったりする。

少しすると扉が開いて亜矢が出てきた。

「今度は明美の番だね。僕が見てるよ。」

「ありがとう。少し失礼するわね。」

明美が入った直後に、扉の開く音がして夏美が出たようだ。

夏美がしきりに怖がっているのを亜矢がなだめている。

トイレの個室は思った以上に閉塞感があった。

あまり長居したくないので早めに済ませようと腰を下ろす。

ふと横を向くと、壁にかけられているはずの物が見当たらなかった。
「あら？ここのトイレットペーパーが・・・。」

赤い紙と青い紙どっちがいい？

ないと言おうとしたところに声を被せられた。

体が硬直するのがわかった。

夏美や亜矢の声ではなかった。

声色の面影も残っていなかった。

というより到底人のものとは思えないものだった。

自分に気のせいだと言い聞かせようと思ったところに、再度声が聞こえてきた。

赤い紙と青い紙どっちがいい？

これは知っている。

怪談等でよく聞く『赤紙青紙』の話だ。

大抵今のように2種類の色を聞かれ、答えを間違えると殺されたり
いたずらをされたりする。

「……………」

明美は咄嗟に悲鳴を飲み込んだ。

赤紙青紙…後編

夏美と亜矢は明美が出てくるのを待っていた。

「ち、ちよつと遅いような気がしない・・・？」

「うん。確かに少し遅いかもしれない。」

「そ、そうだよね・・・。」

「ノックして確認したほうがいいかな？」

ノックしようと足を踏み出そうとした時、勢いよく扉が開かれた。

「二人とも逃げるわよ！」

そういうと二人の腕を掴んで走り出した。

二人は急に捕まれた為に、前のめりに転びそうになる。

「え、ええー！どうしたの？！」

「ちよつと明美！逃げるって何から！？」

明美は何も答えずに駆けだす。

亜矢は体勢を立て直しながら、明美が出てきたトイレを振り返る。

扉は開け放たれている。

中は薄暗くてよく見えなかったが、何故かあのトイレには近づかない方がいいと本能が告げていた。

トイレから飛び出すと男子に合流する。

「どうしたんだお前等？」

「血相変えて飛び出して来たね。」

女性陣は男性陣の前で立ち止まる。

短い距離だったにも関わらず息切れを起こしている。

「顔色悪いぜ？何かあったのか？」

卓海の言うように先頭に立っている明美の様子が明らかにおかしい。
「・・・急いで学校の敷地外へ逃げましょう。」

「明美？急にどうしたの？」

「いいから急いで！」

「え、あ、うん。わかった。」

達也は歯切れの悪い返事をしたが、明美の様子がおかしいことがすぐにわかったのだろう。

再び走り出した女性陣に黙って付いて行く。

他の二人も何も言わずに付いて来ている。

全員が移動を開始したところで明美は口を開いた。

「赤紙青紙に襲われたわ・・・。」

途切れ途切れだったが男性陣の耳にはっきりと届いた。

全員が驚愕の表情を作ったが、誰一人その台詞を疑う者はいなかった。

明美の性格からそういう冗談を言う人物ではないとわかっている。

「本当に、異界に入り混んじやったみたいね・・・。」

明美は苦しそうに呟いた。

方針（前編）

この後どうするか話合うため、百物語を行った教室まで引き返して来た。

だが、誰一人として声を発する人はいない。

実際に怪異に出くわした明美は、普段では考えられないほど弱々しくなっている。

沈黙に耐えかねたのか、恐る恐る卓海が口を開いた。

「すまん。どうしても確認しておきたいことがある。」

他の5人が卓海に顔を向ける。

「赤紙青紙って、何だ？」

本当にわからないという具合に尋ねる。

夏美を除いた4人が脱力する。

百物語の最中に話題に出たにも関わらず忘れたらしい。

少し気まずそうに顔を逸らす。

ちなみ夏美は卓海側だ。

夏美の場合は怖がって耳を塞いでいたからだが・・・。

「僕が説明するよ。」

亜矢が説明係を買って出る。

「赤紙青紙っていうのは学校の怪談によくある話の一つだよ。トイレの個室に入ったときにどこからともなく『赤い紙と青い紙どっちがいい？』って聞かれるんだ。」

「俺なら赤だな。」

何も知らない卓海は好きな方の色を答える。

「それだと体中を傷だらけにされて、血で真っ赤にされて殺されちゃうよ。」

「んな！？なら青だ！」

「それだと今度は体中から血を抜かれて真っ青にされて殺される。」

「じゃあ結局殺されるんじゃないか！」

「そうなんだけど、この場合はそのどちらとも違う色を答えるか、何も言わないことで回避できるっていうのがお約束みたいだよ？地域によっては聞かれた時点でアウトらしいけど。」

「そうなのか……。怖えな。」

「そうだね。明美と違って卓海は確実に殺されちゃってたってところとかね。」

「達也！嫌なこと言うなよ！！」

「ごめんごめん。でも、事実だよ。」

「そうだけだよ……。」

「で、でも、明美が無事が無事で良かったよ……。」

夏美は泣きそうになりながら明美にしがみついている。

明美は相変わらず青い顔をしている。

「夏美……。ごめんね。」

そう呟くと明美は夏美を抱きしめる。

「んなことより、これからどうするか考えた方がいいんじゃないかねえのか？」

雅人がそう切り出すことで場の空気が入れ替わった。

明美は青い顔を上げると厳しい表情で同意する。

怪異に触れた本人だからだろう。

その眼はとても真剣だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1887i/>

神隠し

2010年10月9日23時18分発行